

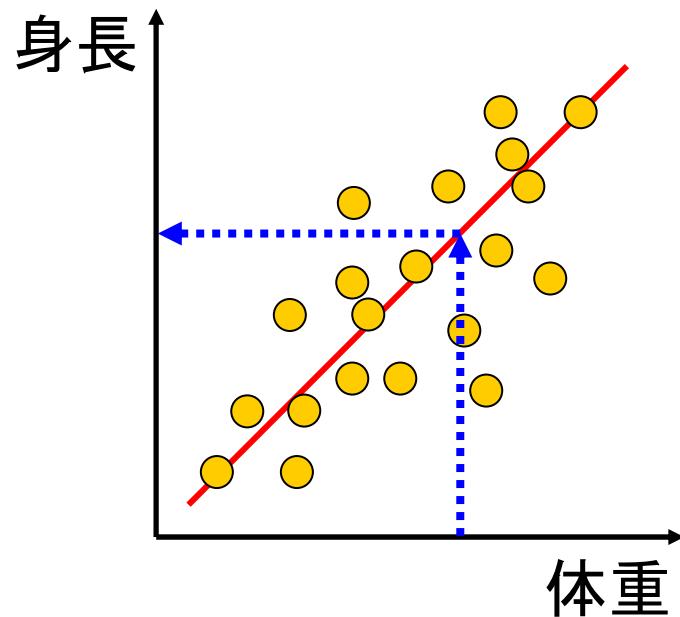
03. 回帰分析

京都大学 加納 学

*Division of Process Control & Process Systems Engineering
Department of Chemical Engineering, Kyoto University*



manabu@cheme.kyoto-u.ac.jp
<http://www-pse.cheme.kyoto-u.ac.jp/~kano/>



体重から身長を推定できる？

$$\text{身長} = \text{定数} \times \text{体重} + \text{定数} + \text{誤差}$$

y b_1 x b_0 e

$$\sum_{i=1}^n e_i^2 = \sum_{i=1}^n (y_i - b_1 x_i - b_0)^2$$
 を最小にする係数 b を求める。

因果関係を探る

- (単)回帰分析

結果である目的変数 y と原因である説明変数 x の関係を**单回帰式**を用いて表現しようとする手法

$$y = b_1 x + b_0$$

(標本)偏回帰係数

現実には、目的変数は説明変数以外の要因にも影響されるため、それらの n 番目の標本(測定値)が**单回帰モデル**によって表現されると考える。

$$y_n = \beta_1 x_n + \beta_0 + \varepsilon_n$$

母偏回帰係数

誤差項 ε_n は互いに独立に $N(0, \sigma^2)$ に従うと仮定する。

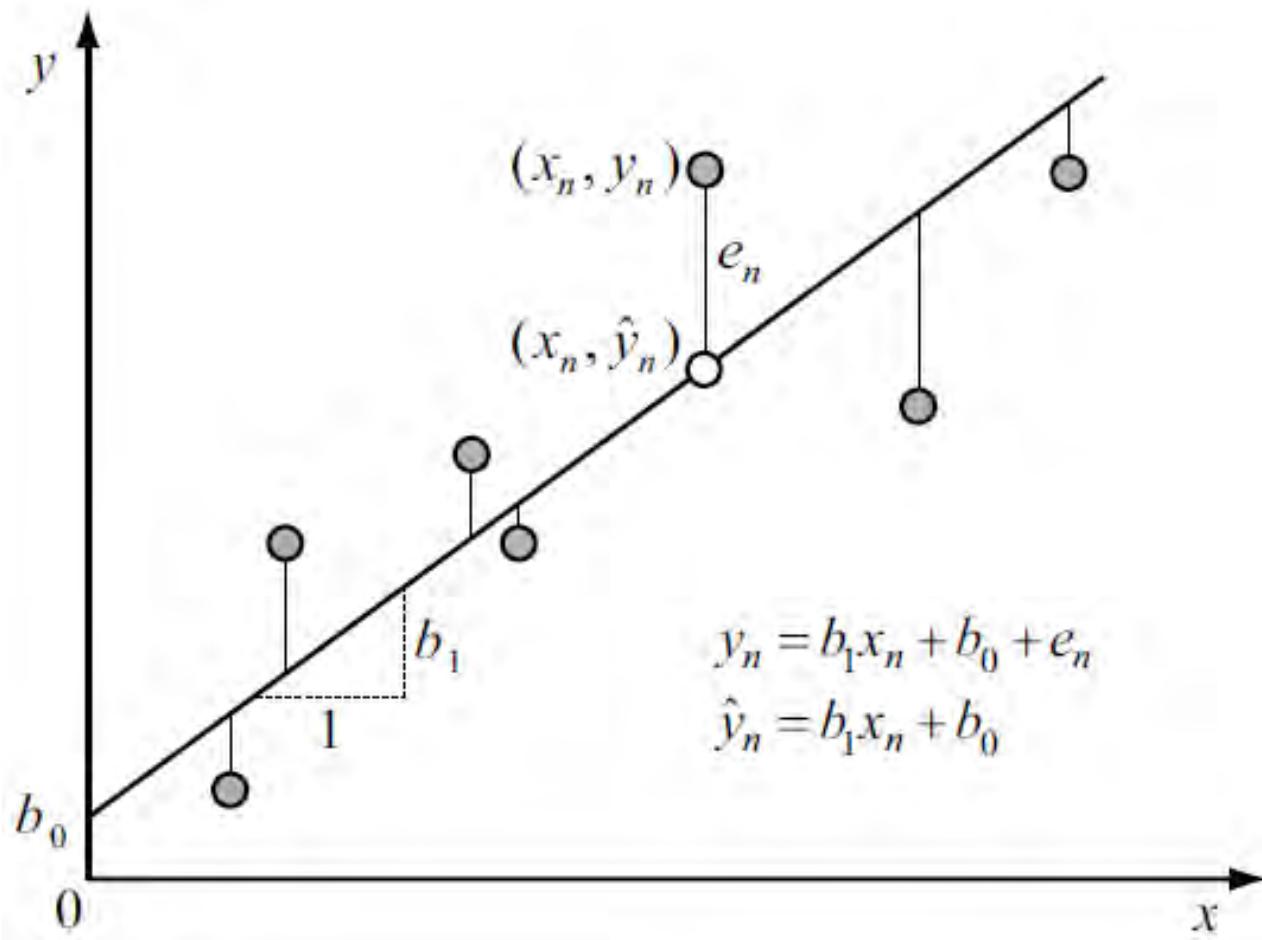
目的変数の予測

- 目的変数の期待値
誤差項 ε_n の期待値は 0 であるから
$$E(y_n) = E(\beta_1 x_n + \beta_0 + \varepsilon_n) = \beta_1 x_n + \beta_0$$
- 目的変数の予測値
母偏回帰係数 β_0, β_1 の推定値 b_0, b_1 が得られれば
$$\hat{y}_n = b_1 x_n + b_0$$
- 残差
目的変数の測定値と予測値の差

$$e_n = y_n - \hat{y}_n = y_n - b_1 x_n - b_0$$

回帰分析における誤差の考え方

- 目的変数 y に影響を与える説明変数 x 以外の要因をまとめて誤差とみなすため、 y のみに誤差がある、つまり、 x は正確に指定できると考える。



最小二乗法

● 最小二乗法

残差平方和(目的変数の測定値と推定値の差の二乗和)が最小となるように、偏回帰係数を決定する。

予測値

$$\hat{\mathbf{y}} = \mathbf{X}\mathbf{b}$$

残差平方和

$$Q = \sum_{n=1}^N (y_n - \hat{y}_n)^2$$

$$= (\mathbf{y} - \hat{\mathbf{y}})^T (\mathbf{y} - \hat{\mathbf{y}})$$

$$\mathbf{y} = \begin{bmatrix} y_1 \\ y_2 \\ \vdots \\ y_N \end{bmatrix} \quad \mathbf{X} = \begin{bmatrix} 1 & x_1 \\ 1 & x_2 \\ \vdots & \vdots \\ 1 & x_N \end{bmatrix} \quad \mathbf{x} = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_N \end{bmatrix} \quad \mathbf{b} = \begin{bmatrix} b_0 \\ b_1 \end{bmatrix}$$

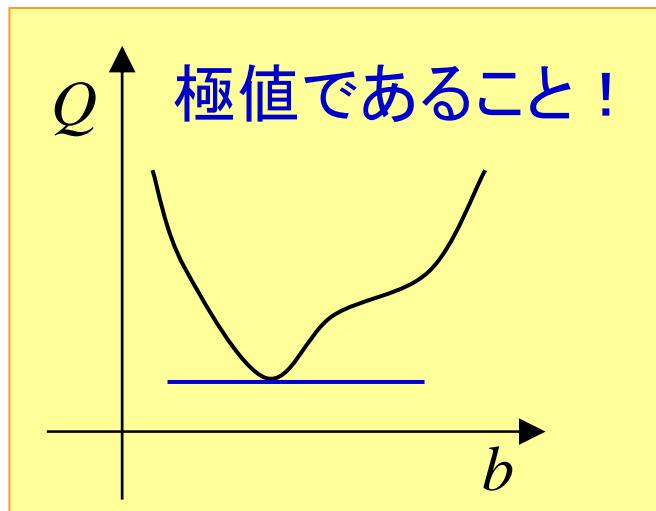
正規方程式の導出

- 残差平方和

$$\begin{aligned} Q &= \sum_{n=1}^N (y_n - \hat{y}_n)^2 = (\mathbf{y} - \hat{\mathbf{y}})^T (\mathbf{y} - \hat{\mathbf{y}}) \\ &= \mathbf{y}^T \mathbf{y} - 2\mathbf{y}^T \mathbf{X}\mathbf{b} + \mathbf{b}^T \mathbf{X}^T \mathbf{X}\mathbf{b} \end{aligned}$$

- 必要条件

$$\frac{1}{2} \frac{\partial Q}{\partial \mathbf{b}} = \frac{1}{2} \left[\frac{\partial Q}{\partial b_0} \quad \frac{\partial Q}{\partial b_1} \right]^T = \mathbf{X}^T \mathbf{X}\mathbf{b} - \mathbf{X}^T \mathbf{y} = 0$$



正規方程式

$$\mathbf{X}^T \mathbf{X}\mathbf{b} = \mathbf{X}^T \mathbf{y}$$

偏回帰係数の推定

- 正規方程式

$$\begin{bmatrix} N & N\bar{x} \\ N\bar{x} & \mathbf{x}^T \mathbf{x} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} b_0 \\ b_1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} N\bar{y} \\ \mathbf{x}^T \mathbf{y} \end{bmatrix}$$

- 偏回帰係数の推定値

$$b_0 = \bar{y} - b_1 \bar{x}$$

$$b_1 = \frac{\mathbf{x}^T \mathbf{y} - N\bar{x}\bar{y}}{\mathbf{x}^T \mathbf{x} - N\bar{x}^2} = \frac{(\mathbf{x} - \bar{x}\mathbf{1})^T (\mathbf{y} - \bar{y}\mathbf{1})}{(\mathbf{x} - \bar{x}\mathbf{1})^T (\mathbf{x} - \bar{x}\mathbf{1})} = \frac{S_{xy}}{S_{xx}} = \frac{s_{xy}^2}{s_x^2}$$

偏差平方和

$$S_{xx} = \sum_{n=1}^N (x_n - \bar{x})^2$$

偏差積和

$$S_{xy} = \sum_{n=1}^N (x_n - \bar{x})(y_n - \bar{y})$$

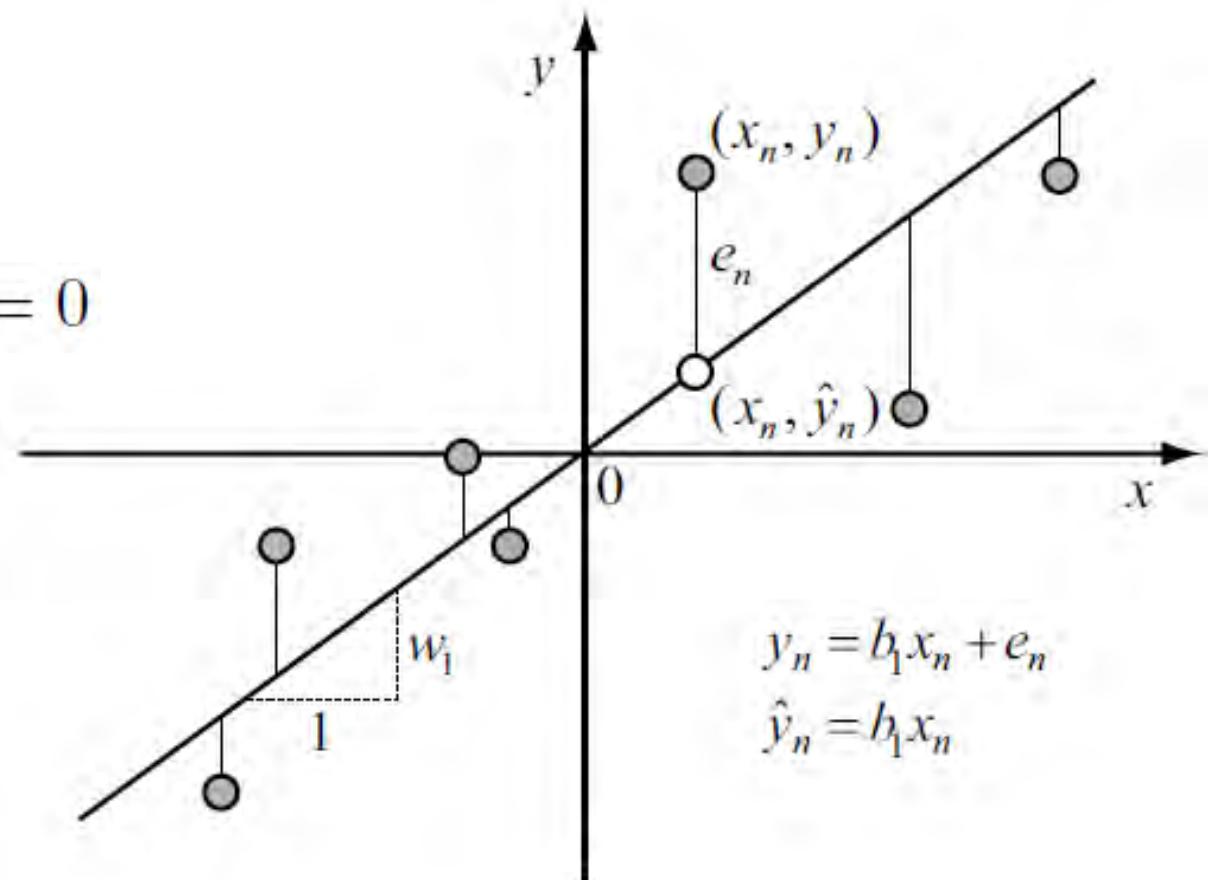
平均を0にする意味

$$b_0 = \bar{y} - b_1 \bar{x}$$

$$\downarrow \quad \bar{y} = \bar{x} = 0$$

$$b_0 = 0$$

$$\downarrow \quad \hat{y}_n = b_1 x_n$$



単回帰式(直線)が原点を通る(切片が0となる)ように、データを移動させる。

標準化の効果

- 単回帰分析で得られる偏回帰係数の値は、説明変数と目的変数の大きさによって変化する。
 - 説明変数が質量である場合、その測定単位が kg か g かによって偏回帰係数の値は異なる。
- 測定単位の影響を排除するデータの前処理方法として、各変数の平均を0、分散を1にする標準化がある。

$$y = \frac{y^* - \bar{y}^*}{s_{y^*}} \quad x = \frac{x^* - \bar{x}^*}{s_{x^*}}$$

$$s_x^2 = \frac{1}{N-1} \mathbf{x}^T \mathbf{x} = 1$$

$$r_{xy} = \frac{s_{xy}^2}{s_x s_y} = \frac{1}{N-1} \mathbf{x}^T \mathbf{y}$$

標準偏回帰係数

$$b_1 = \frac{S_{xy}}{S_{xx}} = \frac{\mathbf{x}^T \mathbf{y}}{\mathbf{x}^T \mathbf{x}} = r_{xy}$$

標準偏回帰係数 = 相関係数

回帰分析の続き

- 母偏回帰係数を点推定し、単回帰式を求める。
- 分散分析により、回帰式が役に立つかどうかを調べる。
- 寄与率や重相関係数を求め、回帰式を評価する。
- 残差が仮定を満たしているかを確認する。
- 偏回帰係数の検定や区間推定を行う。